

# OJT(ON THE JOB TRAINING)に 携わる看護師の考える 教育力の理想と現実

数理システム 学生奨励賞 提出論文

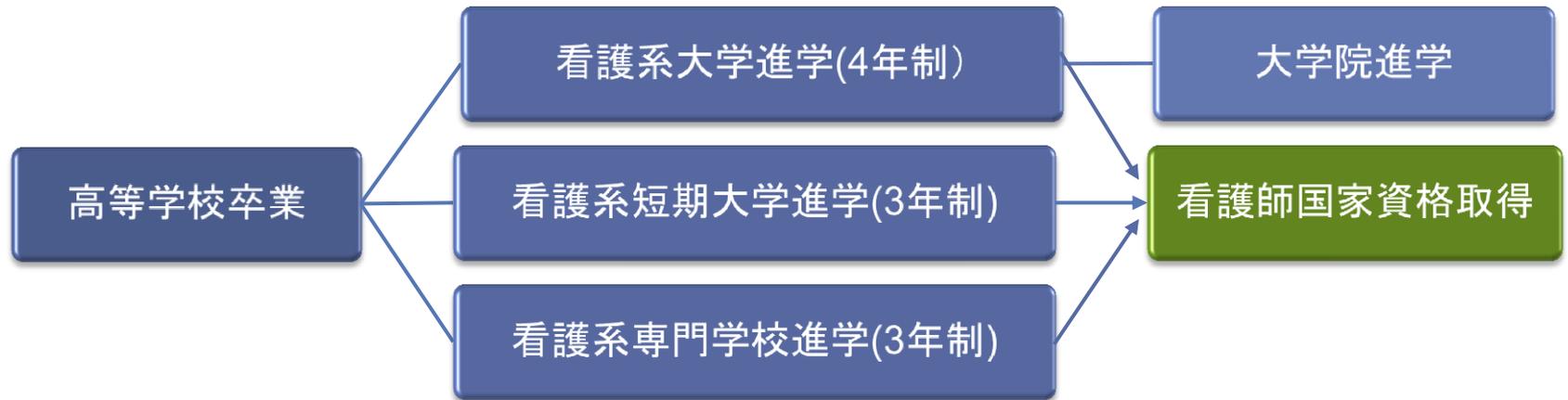
東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科  
大河原知嘉子

# 内容

1. 看護師養成課程の現状
2. 看護におけるOJTの現状と問題
3. 研究目的
4. 研究対象者及び対象者の選定方法
5. 分析方法—第1段階、第2段階
6. 結果—第1段階、第2段階
7. 考察
8. 結論
9. 今後の展開と新たな発展
10. 引用・参考文献

# 看護師養成課程の現状

- 看護師国家資格取得までの道のり



- 各基礎教育機関修了後、国家試験合格した者が、看護師国家資格を取得できる。
- 看護師を養成するための基礎教育機関が、多様かつ複雑である。

# 他医療職養成課程との比較と看護研究の活用



- 同じ専門職の医師、歯科医師、薬剤師とは養成課程が異なる。
- 看護職は医療機関において、大多数を占める存在であり、様々な養成課程をもつ医療職の中では、教育制度の整備を目指す先駆的な位置づけである。そのため、卒後看護教育の動向は、**今後の医療職教育にも活用できる。**

# 看護における専門学校教育と大学教育の比較

## 専門学校教育



3年制看護師養成教育

看護師としての職能技術を養うための訓練に比重が置かれている

看護師養成を目的とした看護教育課程

## 大学教育



4年制専門職業人育成教育

看護学を学問として、体系づけて学ぶことを目的とした教育課程

一般教養科目が充実しており、幅広い分野の学習が出来る

- 臨床現場では様々な教育背景を持った看護師が協働しており、学び方・教え方は様々である。
- 近年看護師養成課程の大学化が進み、大学数は200校を超えるなか、現場で様々な問題も見えてきている。

# 看護におけるOJTの現状

- 1980年代、新卒看護師育成プログラムである「プリセプターシップ」がアメリカから導入された<sup>1)</sup>。=**看護特有の指導体制**
- プリセプターシップの当初の目的は2つあり、第一に、新卒看護師のリアリティーショックを和らげ、第二に定着率を上げることであった。
- 3～4年目の看護師（プリセプター）が、新卒看護師（プリセプティー）を担当し、技術指導をするというOJT（On the Job Training）の形であった。

20余年経過

- 2004年の調査で、日本の85.6%の病院がプリセプターシップを導入しており、プリセプターの約60%が経験年数3年目未満と若い<sup>2・3)</sup>。
- プリセプティーに出来ない事があると、プリセプターの責任という病院もあり、自己の知識・技術不足を感じ、重責に耐えきれなくなるプリセプターもいるという現状がある。

# 臨床現場における問題

- 医療の高度化に伴い、質の高い看護実践能力が求められる。
  - 看護師の人員不足と新卒看護師の高い離職率。
  - 2010年の日本看護協会の報告<sup>4)</sup>によると、全体として離職率の低下は見られているが、「政令指定都市・東京23区」「医療法人」「個人」「小規模」病院で依然高い現状。
  - 中堅看護師は、OJTによる新人指導や委員会参加など、業務量の多さが負担となり、離職にいたるケースがある。
  - 新卒看護師に即戦力となる実践能力を求める臨床側と、自律性や自ら考える力が必要と考える大学側とのギャップ。
- 
- 新卒看護師の増加・多様化と共に、OJT教育を行う側への負担や中堅以上の看護師の疲弊が見られる。
  - 教育体制の整備と、OJT教育者の教育力向上を支援する事が急務である。

# 研究目的

- OJTに携わる指導看護師への負担軽減や、プリセプターへの精神的なフォローを充実させるためにも、今、指導看護師に教育力が求められている。
- 教育力すなわち、指導看護師の教育的機能が高まることで、多様な教育背景を持った看護師の個別性に合わせた教育を行うことが出来る。
- 看護実践能力だけでなく、卓越した教育力も看護師の技能として臨床現場で評価されるべきである。



そこで

OJTに携わっている看護師は、第一に、教育力とはどのような能力で、どのような人に教育力があると考えているのか、第二に、受けてきた教育背景により、考え方に特徴があるのかについて、実情を明らかにすることを目的とした。

# 研究対象者及び対象者の選定方法

## □ 対象者

首都圏内の大学附属病院2施設、総合病院1施設に勤務する看護師で、以下の条件を満たす者25名を対象とした。

1. 臨床経験5年以上の者
2. 臨床現場で指導的役割を担っている者
3. 本研究への同意が得られた者

## □ 対象者の選定方法

便宜的標本抽出法であるsnowball samplingを用いて対象者を選定した。snowball samplingとは、初めの標本メンバーにその適正基準に合う、他の人々を紹介するよう求める方法である<sup>5)</sup>。

- ◆ 1人目の対象者は、研究趣旨を理解した各病院の看護部長が「教育的に卓越している」と考える看護師1名の紹介を受けた。
- ◆ 2人目以降は、面接が終了した被験者が「教育的に卓越している」と考える看護師1名の紹介を受け、同意が得られた者に面接を行うことを繰り返した。同じ病棟配属者が4人以上続くときは、新たに看護部長の推薦を依頼した。

# 分析方法—第1段階

- 分析は以下2段階の方法で行った

## 第1段階

- 研究者が事前に作成したインタビューガイドに基づき、「指導者が教育的機能を果たすために何が必要か」「教育力があると思う人はどんな人か」について、半構成面接調査を行った。
- 調査内容は、被験者の許可を得てICレコーダーに録音した。
- ICレコーダーの録音内容から逐語録を作成し、「Text Mining Studio Ver4.0」に入力し、形態素解析を行った。
- 逐語録から教育力や教育力のある人に関する内容を抽出するため、注目語情報で「教育力」「人」それぞれと共起関係にある名詞を抽出した。

# 分析方法—第2段階

## 第2段階

- 第1段階の注目語情報で抽出された名詞を含む原文を抽出した（コロケーション解析）<sup>6)</sup>。
- 抽出された原文から、1文章1意味内容になるように文章を構成し、コードを作成した。
- コード作成時は、原文とコードの意味内容に相違がないか、看護や教育に関する知見を持った研究者4名で確認を行った。
- 作成されたコードを、「Text Mining Studio Ver4.0」に入力し、分析を行った。

# TextMiningStudio Ver4.0での分析の流れ

## 第1段階 (原文)

- 基本情報
- 単語頻度分析
- 対応バブル分析
- 注目語情報分析

第1段階は、会話分析のため、文章の方向性が曖昧であると考え、共起関係を中心に分析を行った。

## 第2段階 (コード)

- 基本情報
- 言葉ネットワーク
- 対応バブル分析

第2段階は、原文から意味内容を変えずに抽出したコードを分析したため、方向性を加味した係り受け関係も含めて分析した。

## 研究結果—第1段階

看護師25名の面接から得られた逐語録の分析

# 基本情報

表1. 原文の基本情報

項目	値
総行数	344
平均行長(文字数)	63.4
総文数	344
平均文長(文字数)	63.4
延べ単語数	10,458
単語種別数	1,328

表2. 原文の品詞と出現頻度

品詞	出現回数
名詞	4,406
動詞	3,318
形容詞	790
副詞	298
連体詞	245
接続詞	45

- 看護師25名への面接から得られた逐語録の総行数は344だった。
- 平均文字数は63.4、延べ単語数は10,458、単語種別数は1,328であった。
- 延べ単語数と単語種別数から算出される、語りの豊かさを示す指標であるタイプ・トークン比<sup>7)</sup>は、0.13であった。
- 品詞は、名詞が4,406と一番多く、次に動詞が3,318だった。分析対象が会話の逐語録であるため「思う」など、会話の最後に付属するものや、「ある」「する」「なる」など、それだけでは意味をなさないものが多く、名詞に限定する方が語りの内容をイメージしやすかったため、分析対象は名詞とした。

# 単語頻度解析

表3. 原文の単語(名詞)頻度解析

	単語	頻度
1	人	132
2	自分	122
3	教育力	87
4	教育	78
5	相手	66
5	必要	66
7	時	59
8	所	55
9	指導	50
10	患者	34
11	力	33
12	スタッフ	32
12	看護	32
14	子	31
15	話	30
16	一緒	26
17	今	23
18	大事	18
18	知識	18
20	駄目	17

\* 上位20件を表示

- 原文から得られた名詞頻度分析の上位20位の結果である。
- 「人」が一番頻度が高く132、続いて「自分」、本研究のテーマである「教育力」と続いた。
- 人に関する名詞「人」「自分」「相手」「患者」「スタッフ」「子」が上位20位に含まれていた。その中でも、指導や教育の対象としては、「相手」「スタッフ」「子」という名詞が、上位に位置づけられていた。
- 「患者」「スタッフ」「看護」という看護・医療に関する名詞が、上位20位に含まれていた。

# 注目語情報—「教育力」

## 注目語情報設定

- 注目語:教育力
  - 頻度:2回以上
  - 信頼度:60
  - 品詞設定:オリジナル(名詞)
- 行内の重複は1回とカウントした

## 共起単語ネットワーク

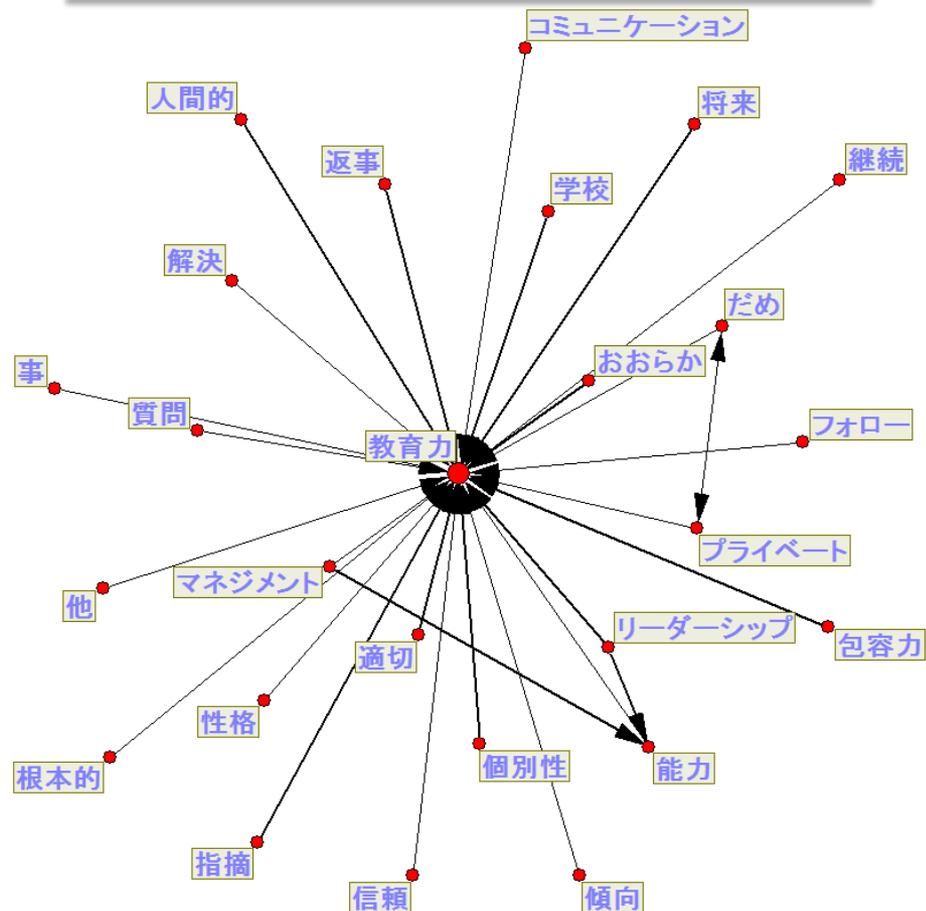


図1. 「教育力」に対する共起単語ネットワーク

# 「教育力」と共起関係にある名詞の頻度

表4. 「教育力」と共起関係にある名詞頻度

	単語	頻度
1	コミュニケーション	12
2	能力	12
3	他	8
4	事	6
5	フォロー	5
6	信頼	5
7	プライベート	3
8	マネジメント	3
9	解決	3
10	傾向	3
11	継続	3
12	根本的	3
13	指摘	3
14	質問	3
15	性格	3
16	おおらか	2
17	リーダーシップ	2
18	学校	2
19	個別性	2
20	人間的	2

- 「教育力」と共起関係にあった名詞は、23個抽出された(頻度2回以上)
- 「コミュニケーション」「能力」の頻度が高く12回であった。

\* 上位20件を表示



# 「人」と共起関係にある名詞の頻度

表5. 「人」と共起関係にある名詞頻度

	単語	頻度
1	話	30
2	感じ	12
3	仕事	11
4	勉強	10
5	発揮	9
6	他	8
7	理想	8
8	苦手	6
9	個人	6
10	好き	6
11	フォロー	5
12	影響	5
13	教育的	5
14	言い方	5
15	姿	5
16	姿勢	5
17	私生活	5
18	情報	5
19	信頼	5
20	尊敬	5

- 「人」と共起関係にあった名詞は、69単語抽出された(頻度2回以上)。
- 「話」の頻度が一番高く30、続いて「感じ」が頻度12、「仕事」が頻度11だった。
- 抽出された69単語のうち、12単語が「教育力」との共起関係で抽出された名詞と重複していた。(以下「重複」とする)

\* 上位20件を表示

## 研究結果—第2段階

第1段階で抽出された名詞のコロケーション解析  
から得られた原文より作成されたコードの分析

# コロケーション解析とコードの基本情報

## コロケーション解析結果

- 「教育力」、「人」との共起関係から抽出された名詞80単語を原文に戻し、コロケーション解析を行った結果、224コードが作成された。

表6. 224コードの内訳

共起単語	コード数
教育力のみ	35
人のみ	136
重複	53
合計	224

## コードの基本情報

表7. コードの基本情報

項目	値
総行数	224
平均行長(文字数)	13.3
総文数	224
平均文長(文字数)	13.3
延べ単語数	1,162
単語種別数	474

# コードの分類

- コロケーション解析にて得られた教育力に関する224コードの内容が、どのような現象から発生しているか（＝教育力の源）により、3パターンに分類しコードの属性とした。

## 実践パターン

- 指導看護師が教育力として実践している内容

## 経験パターン

- 指導看護師自身が教育された経験の中から教育力だと考えた内容

## 理想パターン

- 理想として教育力として持っているべきと考えた内容

# 「教育力の源」別対応バブル分析

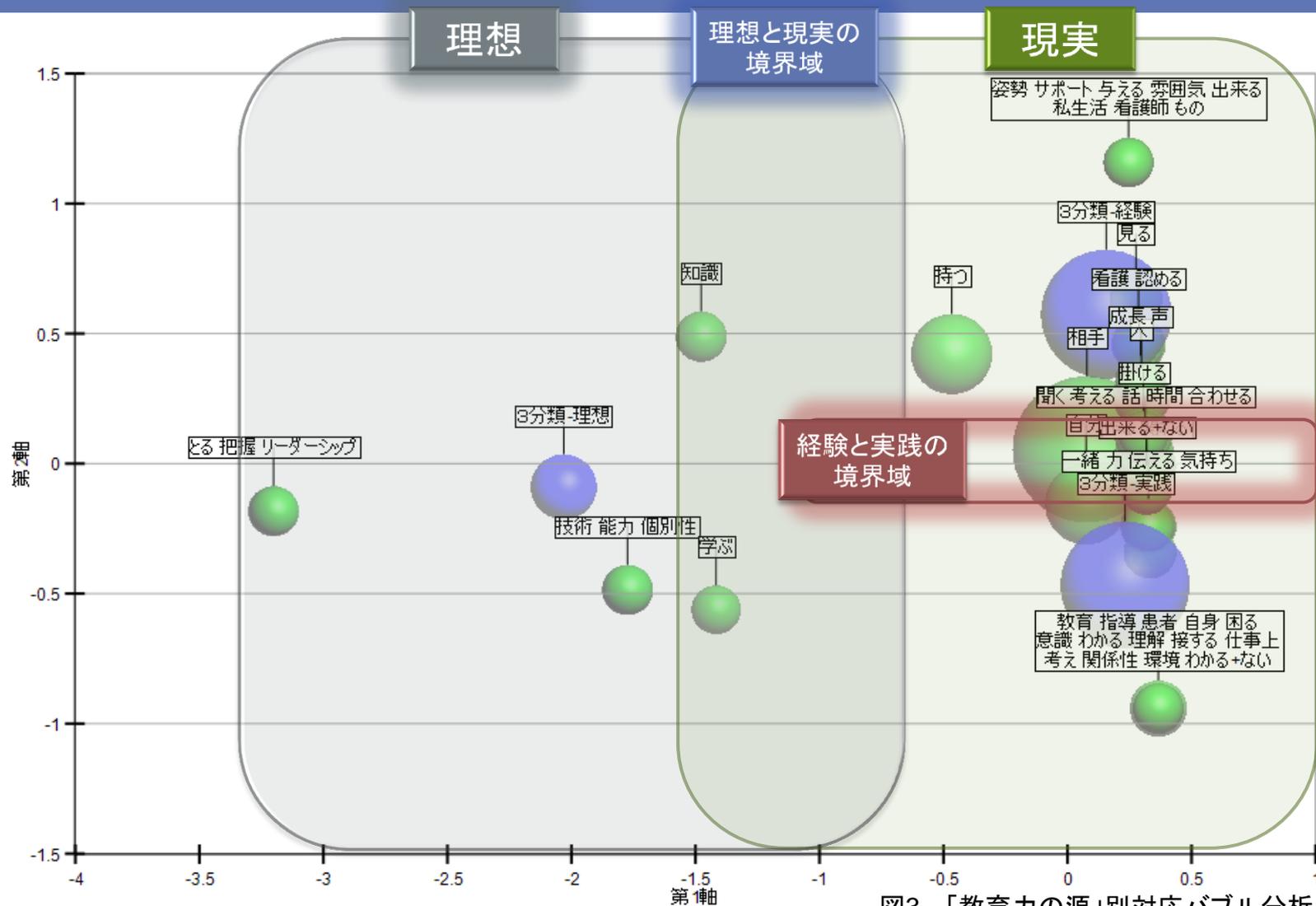


図3. 「教育力の源」別対応バブル分析

# 「教育力の源」別対応バブル分析

- 224コードを属性「教育力の源」と対応させてバブル分析を行った。教育力のコード内容には、「持つ」「聞く」「考える」などの動詞が名詞より高い頻度で含まれていたため、品詞設定はオリジナル(名詞・動詞)設定、頻度2以上とし、属性と言葉の関係を抽出した。
- 経験パターンと実践パターンは、近い位置関係にあり、縦に連なっていたが、理想パターンは他2パターンと離れた場所に位置していた。
- 実践パターンには、「教育」「一緒」「力」「伝える」「患者」「指導」等の単語が多用されていた。
- 経験パターンには、「看護」「見る」「認める」「サポート」「姿勢」等の単語が多用されていた。
- 実践パターン、経験パターンの境界では、「相手」「自分」「聞く」「考える」「話」等の単語が多用されていた。
- 理想パターンでは、「技術」「能力」「個別性」「把握」「リーダーシップ」「知識」「学ぶ」等の単語が多用されていた。

# コードの言葉ネットワーク分析

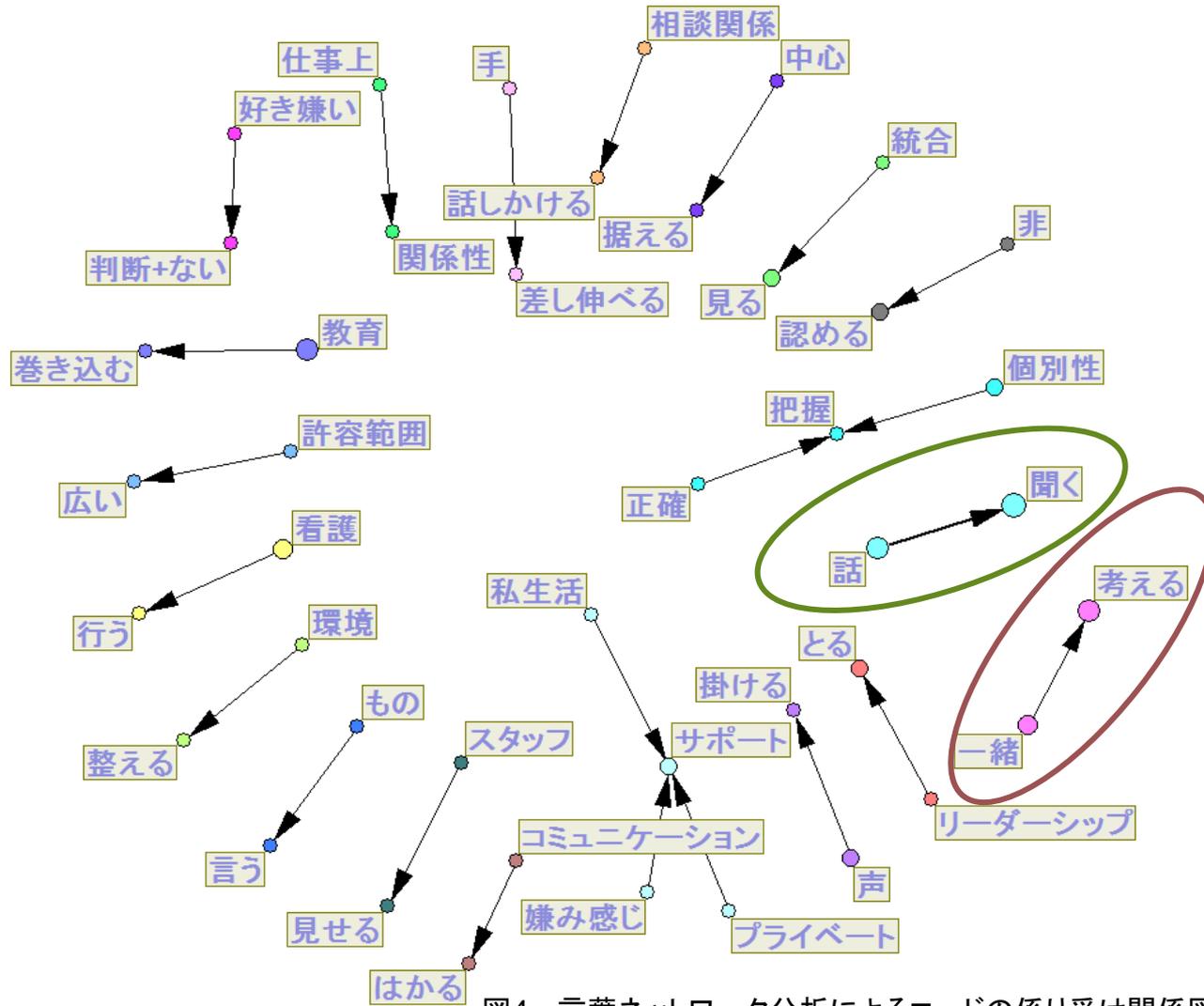


図4. 言葉ネットワーク分析によるコードの係り受け関係図

- 単語だけでなく、より詳しいコードの構成や係り受け関係を知るため、言葉ネットワーク分析を行った。
- 係り受け関係を抽出、話題一般設定(名詞・動詞・形容詞)、頻度2回以上の分析では、教育力について20のクラスターが得られた。
- 「話－聞く」は頻度が高く、係り受けの関係も強かった。その他にも、「一緒に－考える」の頻度が高かった。

# 最終学歴別対応バブル分析

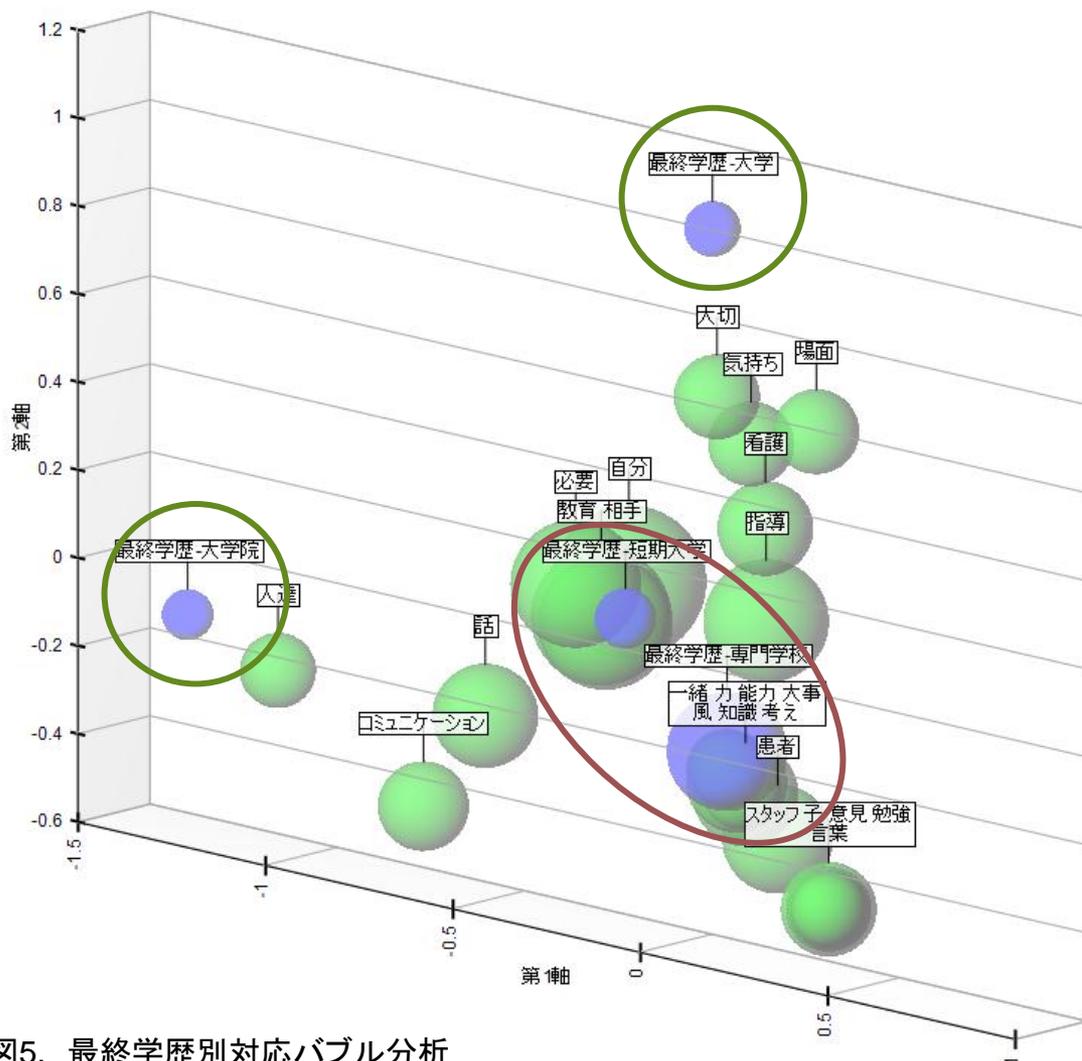


図5. 最終学歴別対応バブル分析

- 属性とことば(名詞)の関係に関する対応バブル分析である。オリジナル設定、上位20位、頻度2回以上で分析した。
- 属性は最終学歴(専門学校、短期大学、大学、大学院)とした。
- 3年制教育の専門学校、短期大学は近い位置関係で、大学や大学院とは、対角の位置関係にあった。
- 専門学校群は「患者」「知識」「能力」「子」などの単語を多用し、大学群は「大切」「気持ち」などの近くに配置された。

# 考察

# 考察一全体

- 本研究では、OJTに携わる看護師の教育力を高めるための関わりを探るため、指導看護師が考える教育力の実情を明らかにした。
- 今回、所属病院や最終学歴など、背景が異なる25名の指導看護師に、半構成面接調査を行い、録音データから得られた逐語録を分析した。
- 逐語録の総行数は344、延べ単語数10,458、単語種別数1,328であった。語りの豊かさを示すタイプ・トークン比は0.13だった。これは本研究が、「看護」という専門領域における教育についての会話分析であり、それぞれの看護師が置かれている状況や、語りの内容が近かった事が理由として考えられた。さらに、対象者が強調したいと考えた内容が多く、同じ語りを繰り返した事も推察された。
- 会話内容の形態素解析による特徴として、「ある」「する」「なる」等、これだけでは意味の取れない動詞が多かったこと、会話の最後に「思う」など、自分の考えや思いを述べるための動詞が、繰り返し使用されていたことなどが挙げられる。

# 考察一名詞頻度解析

- 原文の名詞頻度解析では、「人」「自分」「教育力」「教育」「相手」「必要」の頻度が高かった。この理由は2点考えられた。第一に、半構成面接において、これらの単語が研究者からの質問に含まれていたため、第二に、指導対象や教育力があると考えた人物に関する語りや、対象者自身の経験が多く語られていたためであった。
- 看護のOJTに関する語りであるため、頻度上位20位の中には、「患者」「スタッフ」「看護」など看護特有の単語が出現していた。
- プリセプターシップによる姉妹関係や師弟関係を象徴する語として、指導相手をさす「子」が14位にあった。これは「プリセプティー」「後輩」(共に頻度11)など、指導対象を直接的に示す語より頻度が高かった。「子」は子供、まだ一人前に成長していない者という意味<sup>8)</sup>があり、担当するプリセプティーを、一人前でない妹分として指導する形式を示唆した。「子」はプリセプターシップを長きにわたり行ってきた看護のOJT教育を考える上で特徴的な語であった。

# 考察ーコロケーション解析

- 原文の共起関係をもとにコロケーション解析を行い、その後224コードを作成した。
- コードは看護や教育に関する専門的知識を持つ人間によって作成し、協議・分析を重ねることで精度を保持した。コード作成では原文をもとに口語では表現されなかった内容を整理したが、その結果、語りの内容が十分に反映された、深みのある分析を行うことが出来た。また、4人の研究者で内容の確認作業を行うことで、原文とコードの間に意味内容の相違や飛躍はないと考えた。
- 224コードの内わけを見ると、人との共起関係が136と圧倒的に多かった。指導看護師にとって、「教育力」という言葉は馴染みが薄かったため、教育力がある人、すなわち人物を連想することにより、教育力についての語りが引き出されたことが推察された。

# 考察－「教育力の源」別対応バブル分析

- 224コードの内容を、教育力がどんな事象から発生しているかという視点から、「実践」、「経験」、「理想」の3つに分類し、それを属性として分析を行った。
- 指導看護師は、理想や前提として、「技術」「能力」「個別性」「把握」などを教育力として挙げていたが、実際に自分が教育を受けた経験や教育力として実践している内容は含まれていなかった。すなわち、対象者は、看護師としての能力や技術力がある人が教育を行うべきだと考えていたが、指導看護師が感じる現実的な教育力とは、話を聞くことや声を掛けること、自分の弱みを見せたり、職場だけでなく私生活を嫌みなくサポートすることなどであった。
- 属性「理想」の近くには、リーダーシップも布置されていた。対象者のほとんどが、臨床現場で管理業務を行っている、もしくは管理的な役割を果たしていた。それゆえ、教育力を考えるうえで、自分たちの使命であるリーダーシップをとれることが、教育的機能を果たすために重要と考えたことが推察された。しかし今回、理想ゾーンに配されたことから、リーダーシップや看護実践能力が、教育力を発揮する上で必ずしも必要なのではないということも明らかになった。

# 考察－言葉ネットワーク分析

- コードの係り受け関係を抽出した言葉ネットワーク分析では、「話－聞く」の頻度が10と最も高く、関係性も強かった。以下はコードの一例である。
  - 相手の話を聞くために心身の状態をうまくコントロールする。
  - おおらかに相手の話を聞き、鋭く指摘する。
  - 話を聞こうと相手に思わせる環境に持っていく。
  - 相手の話を否定せずまず聞く。

以上の例のように、まず相手の話を聞く内的・外的環境を作り、次に相手の話を自分の先入観を持たずに聞くことを教育力として考えていた。職場内のソーシャルサポートはバーンアウトの軽減につながるとの報告<sup>9)</sup>もあり、サポートの入口である「話－聞く」は、教育力として重要であると考えた。

一方で、このクラスターには、聞くだけでなく鋭く指摘すること、すなわち、アサーティブなコミュニケーションも含まれていた。看護師は自己表現が苦手で、自分の感情表出に、罪の意識を感じる<sup>10)</sup>ことや、若い先輩看護師は新人に言いたいことを表現しにくい<sup>11)</sup>ことも明らかになっている。今回、相手を否定せず鋭く指摘することは、アサーションだけでなく、教育力の要素にも含まれることが明らかになった。

# 考察—属性別「最終学歴」

- 混沌とする看護師の教育背景が、本研究のテーマである教育力に及ぼす影響を明らかにするため、最終学歴を属性とし、対応バブル分析を行った。その結果、教育背景の違いにより、教育力に関する考え方に差異が生じていた。
- 専門学校卒の指導看護師は、「一緒」「知識」「能力」「勉強」「子」「言葉」という単語を多用しており、指導をする子(相手)と一緒に何かをすること、知識や能力があり患者に対する看護実践能力の高いことが教育力に必要であると考えていることが伺えた。
- 一方で、属性「大学」と「場面」「大切」は近くに布置されていた。大学卒の指導看護師は、相手が成長する場면을捉えることを大切にしており、場面の中で相手が自ら学べる環境を整えることを教育力としていることが考えられた。
- 平成20年厚生労働省「看護基礎教育の在り方に関する懇談会」では豊かな人間性、人としての熟成などが看護職に求められていると述べられている<sup>12)</sup>。今回の結果からも、大学教育により、様々な教養や経験を養った看護師を育成し、指導対象が自ら学び成熟していけるよう、環境を整える事で「大人の学び」を支えられるような教育力が必要である事が示唆された。

# 結論

# 結論

- 本研究において、OJTに携わる指導看護師の考える教育力の実情や、教育背景の違いによる考え方の違いを明らかにした。
- 1. 25名の看護師から得られた会話の分析では、教育や看護に関する単語が抽出された。その中でも、プリセプターシップの流れに影響を受け、指導相手を表す「子」も、高い頻度で使用されていた。
- 2. 教育力として、看護実践能力や知識がある事を理想としていたが、実際には話を聞くことや声を掛けること、自分の弱みを見せるなど、理想とは違う内容を教育力として感じている現実があった。
- 3. 3年制の職能教育を受けた者と4年制の医療人育成教育を受けた者では、教育力に関する言葉の関係性に違いが見られた。3年制教育である専門学校出身の者は、指導相手と一緒に何かをすることや、看護実践能力が高いことを教育力として語っていた。それに対して、4年制大学で看護を学んだ者は、相手が自ら学べる場面を捉えることを教育力として語っていた。これにより、多様な環境の中で学んだ看護師を育成することが人としての成熟に繋がり、また教育力のある看護師を育てることに繋がると考えられた。

# 今後の展開

- 本研究では、半構成面接調査から得られた逐語録をもとに、テキストマイニングを行った。会話の分析では、主語、述語が必ずしも存在せず、また前後することもあるため、係り受け関係を分析することが困難であった。しかし、共起関係をもとに抽出されたコードを作成し、テキストマイニングの手法を使用し、再度分析することにより、係り受け関係も加味した分析を行うことが出来た。
- 今回の対象者は3病院に勤務する25名の看護師のため、データ量が限られ、一般化は困難であった。今後は、この結果をもとに、クラスター解析やグルーピングを進め、客観的な視点で文章を分類し、より多くの教育力に関する会話の逐語録や、自由記載文章の分析を、テキストマイニングにより系統的に行いたい。
- 本研究では教育力の語りについての分析だったが、他にそれぞれの対象者のロールモデルや目標などに関する考えも聞いている。今後はこれらのデータのテキストマイニングを行い、今回得られた教育力に関する結果との類似性や相違点などを見出したい。そして、それぞれの結果を属性として新たな切り口として解析を行うことで、教育力の源に関する新たな知見を得たい。

# 引用・参考文献(1)

1. Polit D, Hungler B. 近藤潤子監訳,(1994): 看護研究原理と方法.: 医学書院 1987.
2. 永井則子. プリセプターシップの理解と実践 : 新人ナースの教育法. 3rd ed.: 日本看護協会出版会; 2009.
3. 廣瀬佐和子. 「2005年新卒看護職員の入職後早期離職防止対策報告書」概要. 看護 2006;58(10): 030-031.
4. 社団法人 日本看護協会広報部: 「2009年看護職員実態調査」「2009年病院における看護職員需給状況調査」から見る看護の現状と課題, 2009; <http://www.nurse.co.jp>
5. 佐藤佳子, 米澤弘恵, 荒添美紀, 石綿啓子, 豊田省子, 大下静香. 看護師のプリセプターとしての役割意識. 獨協大学看護学部紀要.2008;1:13-22.
6. 田野村 忠温. コーパスからのコロケーション情報抽出 : 分析手法の検討とコロケーション辞典項目の試作. 阪大日本語研究 2009 2009-02;21:21-41.
7. 金明哲. テキストデータの統計科学入門.: 岩波書店 2009.
8. 金田一京助, 山田忠雄, 柴田武, 酒井憲二, 倉持保男, 山田明雄. 新明解国語辞典 第五版.: 三省堂 1998.
9. 贅川信幸, 松田修. 看護師のバーンアウトとサポート源の関連に関する研究. こころの健康2005;20(1): 25-35.
10. 渋谷菜穂子, 奥村太志, 小笠原昭彦. 看護師を対象としたRathus Assertiveness Schedule日本語版の作成. 日本看護研究学会雑誌 2007;30(1):79-88.

## 引用・参考文献(2)

12. 齋藤訓子, 太田真里子, 齊藤淳子, 多賀秀樹. 【「看護教育の大学化」提言のインパクト 実現に向けての道程を探る】「看護基礎教育4年制大学化」推進にいたる過程と展望. 看護教育 2008 10;49(10):908-914.
13. 服部兼敏. テキストマイニングで広がる看護の世界. 初版第一刷.: ナカニシヤ出版; 2010.
14. 服部兼敏, 鷺田万帆. 【テキストマイニングの有効性を考える・1】学際的技術としてのテキストマイニング その意義と看護における可能性. 看護研究 2008 05;41(3):239-248.
15. 鷺田万帆, 服部兼敏. 【テキストマイニングの有効性を考える・2】看護におけるテキストマイニングとその活用事例. 看護研究 2008 05;41(3):249-258.
16. 上野栄一. 内容分析とは何か: 内容分析の歴史と方法について. 富山医科薬科大学看護学会誌 2008-12;9(1):1-18.
17. 上野栄一. 内容分析の歴史と質的研究の今後の課題. 富山医科薬科大学看護学会誌 2004;5(2):1-18.
18. 一ノ山隆司, 村上満, 舟崎起代子, 上野栄一. 入院中の統合失調症患者を支える家族の日頃の心理的負担に関する研究. 共創福祉 2008 11;3(2):21-30.
19. 加藤千佳, 城丸瑞恵, いとうたけひこ. テキストマイニングを用いた病棟看護師の実習指導に対する語りの分析. 昭和大学保健医療学雑誌 2011 03(8):23-33.
20. 石川慎一郎, 前田忠彦, 山田誠. 言語研究のための統計入門. 第二版.: くろしお出版; 2011.
21. 藤井美和, 李政元, 小杉考司. 福祉・心理・看護のテキストマイニング入門.: 中央法規出版; 2005.